

「ドスン」夜中にベッドから転げ落ちた妻。声をかけても反応が薄い。すぐに救急搬送。3人の我が子は状況が呑み込めていなかった。

「脳梗塞です。覚悟をしておいてください。」

搬送された病院で言われた最初の一言、まるでテレビドラマの中に自分がいるようであった。何を言われているのかが分からず、自分の感情が追い付いてこなかった。救急措置で一命は取り留めたものの、危険な状態はなお続いた。ICUでは、まだ星になるのは早いぞと、子どもの写真や動画を見せて励ました。混濁する意識の中、妻はしっかりと我が子を見ていた。こんなことでママはいなくならない！ママは負けない！そんな表情に見えた。

懸命な処置の結果、倒れてから3週間後、ついに酸素マスクが取れた。その時の喜びは今でも鮮明に覚えている。脳のおよそ3分の1が欠損したCTを主治医の先生に見せてもらい、「今、生きているのが奇跡です。」と告げられた。きっと子ども達が、何か見えない力をくれたのだろう。家族のつながりと、妻の母親としてのパワーを感じた。その後、懸命なりハビリを行い状態は日々改善されてはきたが、様々な後遺症が残ることになった。

『肢体不自由』主に右半身麻痺が残存した。右腕はもう二度と動くことがなく、右足も動きにくく、歩行には装具や杖が欠かせなくなった。退院前にした外泊、数ヵ月ぶりに帰宅する我が家への帰り道、車中で「右手、動くようになるかなあ。」「子どもを乗せて、自転車に乗れるようになるかなあ。」と呟く妻。私は辛くて、苦しくて、何も言えなかった。どう答えていいか分からなかった。

外出訓練時に、人ごみの中を歩行する訓練を行った。周りの人とぶつからないか、迷惑にならないかと不安でいっぱいになった。しかし、いざ歩いてみると、周りの方が当たり前のように妻にぶつからないように気をつけて歩いてくれた。妻の周りだけ、人ごみがなくなった。私は人の温かさを感じ、究極のバリアフリーを目の当たりにした。心にバリアがあったのは、自分自身だったのかもしれない。

『失語症』思うように言葉を発することができなくなった。話の内容は理解していて、受信はしっかりとできるが、発信が難しいというイメージ。「えっとー」「あー」と言葉が中々出てこなくなった。当初は、話そうとしても中々話せない妻に対して、「もういいわ！」とついカットになってしまうこともあった。妻の障害と向き合うことができていなかった。やはり自分自身の心にバリアがあった。失語症は、言葉が理解できていないのではなく、頭ではイメージできている内容が言葉として表現できにくくなってしまったものだという。それを学んでからは、妻の障害を踏まえた上で接することができるようになった。障害を理解すれば、障害は乗り越えることができると思う。

『高次脳機能障害』脳卒中や交通事故などで、頭の内外から脳に何らかのダメージを受けた方の多くが発症する障害。見えない障害と言われ、日常生活では障害がわかりにくく、症状としても様々なものがある。妻の場合は、先の予定や見通しといった段取り能力が欠けた。

今、何をすべきなのか？の判断が難しいことがある。例えば、まだこれからすぐに洗濯物が出るのに、待たずに洗濯機を使おうとする。これも当初は、「何故待てないのか。」と腹を立ててしまっていた。でも、この障害を理解すると、「ひとつひとつのプロセスを終わらせていかないと、頭が満員になって処理能力が追い付かない。」と考えることができるようになった。障害の理解は本当に大切だ。とはいえ、日常生活において、常に心にゆとりをもって障害と向き合い続けるのは難しいのも本音であった。

そんな中、福祉サービスの利用の助言を受ける機会があった。説明を聞いた時は、家族以外の力を使うことに抵抗を感じたが、外出訓練時に感じた周りの人々の温かさを振り返り、自分自身の心のバリアを外して利用を始めた。ヘルパーさんと一緒に、妻は手料理を作ることにも挑戦するようになった。外出して美容院や買い物に行くことができるようになった。元通りの生活とまではいかないが、少しずつ、着実にできることが増えている。

作業所への通所も始めた。他の利用者さんや職員の方とのコミュニケーションを楽しんでいて、夕食時には、いつも妻がその日の出来事を楽しそうに話してくれている。障害を家族だけで抱えるのではなく、心のバリアを外して周りに頼ることで、かえって妻の日常がより輝き出したのである。

このことから、障害と向き合うには、家族だけではなく、周りの人々＝社会に頼りながら生活することが欠かせないと感じるようになった。頼ることは決して恥ずかしいことではない。そして私自身、今は障害者の方とも関わる仕事をしている。社会の一員として、当事者の支援はもちろん、その家族の方々も笑顔で生活できるようにしていきたいと考えている。「みんなに助けられて、みんなを助ける。」これは、障害の有無に関わらず当たり前のことなのかもしれない。

最近、妻とランチをした。上手く話せない、身体を動かしにくいなど、様々にサポートが必要な状態ではあるが、今の私にとってそれはあまり重要ではない。ただ、目の前に妻が存在してくれている。一緒にご飯を食べることができる。それが嬉しい。ご飯は、何を食べるか、ではなく、誰と食べるかが大切だ。と言いながら、夫婦そろって大好物の鳥の唐揚げを笑顔でほおぼった。